

## 1. 研究室活動報告

(1975年4月—1976年3月)

### A. 教育哲学研究室

教育哲学研究室は、昨1974年度に教育哲学会第17回大会の会場校を引きうけるにあたって、研究室メンバーの協議にもとづいて、同大会の共同研究の主題として、「高等教育の大衆化」および「日本における教育思想の伝統」の二つを提示した。この二つの主題は、前者が本学提案主題、後者が学会提案主題として両者とも上記大会共同研究として採択され、有意義な研究報告および討論が行なわれたが、前者の主題による共同研究には讃岐和家教授、後者の主題による共同研究には長清子教授が発題者の一人として参加した。今年度の教育哲学研究室の研究活動は、明確に組織立てられた計画に沿ってというよりはむしろ各メンバーのそれぞれの専門領域でかつ各自の関心の下であったが、上記二つの研究主題の研究を継続した。それとともに、教育哲学研究室は、新しく大学院比較文化研究科が増設される等の状況、および変貌しつつある国内、国外の状況等を考慮して、新しい研究課題の策定とその研究計画の検討を進めつつある。

#### a. 教育哲学

日高第四郎教授（客員教授）

1974年度に引き続き大学院において、日本教育行政に関する講義を担当したが、1976年1月病に倒れ、目下入院治療中。

小島軍造教授（客員教授）

健康を害し、自宅にて治療中。

金子武蔵教授（客員教授）

1974年度に引き続き大学院において、西洋近代思想の演習（ヘーゲル及びライプニッツ）を担当した。

讃岐和家教授

1975年度は、前年度にひき続いて、実存主義の教育思想の研究を行なった。科学研究費助成金による総合研究「西洋倫理思想の日本における受容に関する研究」（代表者は、千葉大学の白田貴郎教授）に参加して、「教育思想家の場合」を分担し、1976年1月30日の研究会において、研究報告を行なった。また、前年度にひき続いて民主教育協会主催の「学生生活研究セミナー」の実行委員をつとめた。

## 川瀬謙一郎準教授

## I. 研究中の主題

- (1) 儒教の教育観と古代中国の教養人官僚層の思想との関連について（ウェーバー中国論の一側面）。（前年より経続）
- (2) キリスト教信徒集団の構造とエートス（ウェーバーの所論についての考察）。（前年より経続）
- (3) 明治期の基督者における基督者共同体と伝統的共同体の相違の意識について。

## II. 学会参加, その他

- (1) 日本倫理学会第25回大会（1975年10月11, 12日熊本大学）に出席，共同研究主題「ウェーバー」について，「キリスト教と集団形成のエートス」と題して報告。（I-2 参照）
- (2) 第2回筑波国際シムポジウム「将来の世界における日本の役割——技術・経済および文化に関して——」（1975年12月17, 18日，筑波大学）に出席。
- (3) 昭和50年度科学研究費助成による総合研究「西欧倫理思想の日本における受容に関する研究」（代表者，白田貴郎教授・千葉大学）に研究分担者として参加。（I-3 参照）

## III. 公刊（予定）論文

「キリスト教と共同体のエートス」金子武蔵編『ウェーバー』日本倫理学会編集第9集，以文社，1976年10月刊行予定。（II-1 参照）

## 磯田一雄準教授

この1年，共同研究「教授理論史」は大学院のコースとの関連を持たせるよう計ったが，あまり前進しなかった。

国立教育研究所より研究協力委員を委嘱されている「教育課程の改善に関する基礎的研究」は，最終年度に入り，質問紙による教師・児童調査とその分析，およびユニークな実践を行なっている学校の訪問を実施，『国立教育研究所紀要』に報告書が掲載される予定である。なおその成果の一端は1975年10月に大阪大学で行なわれた「日本教育方法学会第11回大会」で，「特別活動の実態に関する調査研究」（第2次報告）として，藤田昌士，横山宏〔国研〕，西村誠〔東洋大〕，水内宏〔千葉大〕の諸氏と共同発表を行なった。

論文としては上記報告および本紀要所載のもの他に次のものがある。（発表順）

1. 教育課程における特別活動の位置，『特別活動研究』誌，1975年8月号。
2. 学習集団論，『現代教育科学』誌，1976年2月号。
3. 授業と人間形成，『教育』誌，1976年2月号。
4. 教授学研究と生活指導研究の接点，『現代教育科学』誌，1976年5・6月号（予定）。

なお『民間教育史研究事典』（1975年8月，評論社）には「活動」「分団」など14項目，『現代教育学の基礎知識』（Ⅰ・Ⅱ）（1976年2・3日，有斐閣）には10項目を寄稿している。

**b. キリスト教教育哲学**

中川秀恭教授

1. 論文

原始キリスト教における黙示思想

山本和編“終末論”，創文社，1975・10収録

2. 学界研究発表

日本宗教学会学術大会 1975年10月，於天理大学“原始キリスト教における黙示思想と終末論”

3. 書評

小田垣雅世著“解釈学的神学”

“大学キリスト者”59号（1976.3）所載

**c. 教育思想史**

長 清子

1. 1975年4月14日～18日，スイスのジュネーヴにおいて開催された世界教会協議会（WCC）常任委員会に出席した。
2. 1975年5月6日～7日，ニューヨークにおいて開催された UBCHEA（United Board for Christian Higher Education in Asia）の理事会に出席し，アジアにおけるキリスト教関係の高等教育の直面する諸問題，人材交流などの課題につき討議した。
3. 1975年5月8日，Japan ICU Foundation の anual meeting に出席し，ICUにつき報告（学長の報告書に基き）すると共に午餐会において話をした。  
帰途，5月10日，ミシガン州の母校オリヴェット大学より Distinguished Alumni Award を受く。
4. 1975年7月下旬渡英，8月15日～22日にランカスター大学において開催された XIIIth Congress of the International Association for the History of Religions に出席した。同時にイギリスにおける最も新しい大学の一つとしての特色をもつ University of Lancaster を見学。
5. 1975年9月よりサバティカル・リーヴ。10月より Oxford University の St. Antony's College（国際的関心に基いて設立された歴史，及び，地域研究に重点をおく社会科学系の大学院）の Senior Associate Fellow（教授会メンバーの一員）として，日本思想史のセミナーを担当すると共に，研究に当たる。
6. 1975年11月23日～12月10日，アフリカのケニアの首都ナイロビにおいて開催された世界教会協議会（WCC）の第五回総会（the Fifth Assembly）にWCC

会長の一人として出席した。主題は “Jesus Christ Frees and Unites”, 100カ国余より2300人が出席, 正代表は世界の271の加盟諸教会(この会議より加盟教会が286に増加)よりの約700人であった。尚総会前に同じくナイロビで, 11月20日~22日に開かれたWCC常任委員会にも出席した。

7. 1976年1月より2月にかけて Cambridge University の Faculty of Oriental Studies の招請により三回にわたる日本思想史の連続の lectures を行なった。
8. 1976年4月9日~11日ダーラム大学 (Darham University) において開催される British Association for Japanese Studies の年次学会に招かれており, 近代日本思想史の研究論文を発表の予定。

#### 著書

『増補・天皇制思想と教育』(明治図書, 1975年6月)。

#### 編著

1. 近代日本思想大系(10)『木下尚江集』(編集・解説, 筑摩書房, 1975年7月20日)
2. 明治文学全集(88)『明治宗教文学集』(二)(キリスト教関係), (編集・解題, 筑摩書房, 1975年7月30日)

#### 論文

1. 「古いシンボルの連続と伝統の革新——“アジアの近代化”考——」(ICU教育研究18, 1975年3月)
2. “The Weeds and the Wheat: an Inquiry into Indigenous Cultural Energies in Asia” (World Council of Churches, *Ecumenical Review*, July, 1975)

#### d. 比較教育学

**Ben. C. Duke** 教授

#### 著作

Nihon no Sentoteki Kyoshitachi, Kyoiku Kaihatsu Kenkyujo, January, 1975

#### 研究活動

Statistical Trends in Postwar Japanese Education, Comparative Education Review, June, 1975

The Radical Japanese Student Movement: From Poverty Through Affluence, Malaysian Journal of Education, December, 1975

**Edward Beauchamp.**

I am currently working on a study of Professor David Wurry, an American who served as Japan's National Superintendent of Education from 1873-1879. I have also begun preliminary work, with a colleague at the University of Hawaii, on the educational demensions of the American

Occupation of Japan,

## B. 教育心理学研究室

1975年度は研究室人事にも異動はなく、比較的無事といえる日が続いた。

研究室員それぞれが自分の研究課題に取組み、学会発表や研究誌などに研究報告を行なった。

研究室行事としては、1975年5月21日に東京女子大学心理学教授白井常博士を迎えて談話会を、また同年10月17日に来学中のカリフォルニア大学（サンタ・バーバラ）心理学教授の Jerry Higgins 博士の創造性に関する講演と懇談を、ともに ICU教育研究所主催により開催した。

1976年4月2日には首都圏の各大学の発達心理学担当の教員・大学院生を招いて図書館セミナー室で、カリフォルニア大学（バークレイ）の人間発達研究所長 Paul H. Mussen 教授の来日を機に「一日セミナー」を行なった。午前と同博士の講演（通訳は本学心理学出身の近藤（岡木）千恵さん）、午後は三宅和夫・柏木恵子両氏らの、また波多野誼余夫・高橋恵子両氏らの研究発表にひき続き、Mussen 博士のコメントと参加者（約70名）による討議が行なわれ盛会であった。本研究室のスタッフ及び学生の一部は準備・運営・接待に活躍した。

この日の講演や討議の様子は、ビデオなどに録画・録音され後日教材として用いられる。

梅津八三教授

### I. 研究活動

「各種障害事例における行動調整機能としての構成信号系の形成（昭和50年度文部省科学研究費補助、総合A）において、盲ろう者班の研究を分担して、全国的な連絡のもとに常時および随時合宿の実践研究によって盲ろう者教育法の洗練深化を進めた。

また、上記総合研究者の代表者として、盲ろう者班の外に、全盲・盲精薄者班、開眼受術者班、弱視者班、失語症者班、精神薄弱者班、自閉症者班、言語遅滞者班相互の研究連絡、促進にあたり、各種障害の特性をふまえた、構成信号各系の行動調整機能についての理論体系の統合にあたる。

### II. 著 作

- 1) Formation of Verbal Behavior of Deaf-Blind Children. Proceedings of the Twentieth International Congress of Psychology, 1974, 58-74, University of Tokyo Press.
- 2) 重度・重複障害者の教育のあり方。特殊教育, 1974, 4, 2—5.
- 3) Postoperative Formation of Visual Perception in the Early Blind. *Psychologia*, 1975, 18, 171-186.

(H. Umezu, S. Torii, Y. Uemura)

- 4) 順応変換。日本の心理学 (城戸幡太郎先生八十歳祝賀記念論文集), 日本文化科学社。(印刷中)

#### 都留春夫教授

1976年1月より6月までサバティカル・リープで休暇をとっていたが, 7月から勤務にもどった。

#### I. 研究活動等

- 1) カウンセリング事例研究会 全日本カウンセリング団体連絡協議会に関係する有志と共に, 事例研究会を継続的に開くことを計画し, 1975年には第1回と第2回を開催した。
- 2) 大学カウンセリング研究 都内のいくつかの大学の相談室の責任者と共に, 大学におけるカウンセリングの諸問題の研究会を毎月1回開いている。
- 3) Tグループの実践的研究 IPR (対人関係) 研究会の理事として, 感受性訓練を年間5回計画実施し, 実践を通して, Tグループの研究を続けている。

また, 国立療養所看護婦指導性研究会, 本田技研職員指導性研究会などの現任教育の指導を通して, リーダーシップ育成法の現場適用の研究を継続している。

#### II. 学会発表, 講演等

- 1) 1975年12月20～24日 九州大学大学院において, 集中講義をおこなう。
  - 2) 1975年5月24日 日本相談学会研修会において「自己一致」について講演 (東京教育大学)
  - 3) 1975年6月7～8日 雑誌「カウンセリング」編集部主催座談会「カウンセリングの方向」に参加 [この記録は同誌 Vol. 7-2, 3. (1975) に掲載]
  - 4) 1975年7月4日 第6回日本看護学会成人看護分科会大会において「人間の生き方」について特別講演 (広島)
  - 5) 1975年9月5日 日本心理学会第39回大会シンポジウム「グループ・アプローチの基本的課題」司会 (東京国立教育会館)
  - 6) 1976年1月17日, 日本精神技術研究所の主催でシンポジウム「最近のカール・ロジャースを語る」を東京で開催した。
  - 7) 1975年2月3日 国立療養所中部病院付属看護学院において「患者の心理」について講演。
- 同年6月20日 国立三重療養所付属看護学院において「人間の理解」について講演
- 同年11月6日 国立療養所東名古屋病院付属看護学院において「人間中心の援助」について講演
- 同年12月25日 国立療養所再春荘付属看護学院において「人間をみる」について講演, 同日午後再春荘看護学習会を指導。

8) 1975年10月22日神奈川県私学連盟カウンセリング研究会において「ホームルームにおける集団指導」について講演。

9) 1975年11月1日, 大学セミナーハウス開館10周年記念式典に参加挨拶。

10) 1975年10月11日日本IPRの会主催の研究会において「かかわりとであい」について講演。

11) 1975年1月4～7日および1976年1月4～7日, 第1回, 第2回新春カウンセリング・ワークショップ(全日本カウンセリング団体連絡協議会主催)に世話人として参加。

12) 1975年8月1～16日 米国オークランド, ミルス・カレッジにおける, カール・ロジャース主催 'Person Centered Approach' Workshopに参加し, 1974年夏の福島県二本松における 'Inter-Cultural Communication Workshop' および, オランダ, ドリーベルヘンにおける 'Facilitator Development Institute' に引つづき, Cross-cultural Group Living Experience を通して, 異文化間のコミュニケーションおよび対人関係の実践的研究をおこなった。1975年10月17日国際基督教大学心理学教室において 'Person-Centered Approach' Workshop の報告をした。

13) 以上のほか, 下記のような各種団体の研修会の指導をおこなった。

a) 1975年1月23日 長野県勤労青少年福祉推進者講習会。

b) 1975年3月末および5月初旬, 仙台聖ウルスラ修道院 Communication Workshop.

c) 1975年11月8～9日 国立東京第2病院看護婦院内研修会。

d) 1976年1月19日 川崎市保健所勤務保健婦カウンセリング講習会。

### III. 著 作

1) 「病者のこころの動き」(著書)医学書院1975年7月発行

2) 'カウンセリングに学ぶ'「職員研修」(東京都職員研修所発行) Vol. 15 (1975) No. 3, 25～30頁

3) 共感性「LDノート」(総合労働研究所発行) 1975年

4) '受容 (acceptance) と焦点づけ (focusing)' 「カウンセリング」 Vol. 7-2 (1975) No. 28, 14-28頁

5) '最近の C. Rogers の横顔' 「カウンセリング」 Vol. 7-3 (1975) No. 29, 13-16頁

6) '「ひろば」と「まつり」' 「カウンセリング」 Vol. 7-4 (1976) No. 30, 29-31頁

7) '人間の生き方'「第6回日本看護学会集録」1975. 241-255頁

## 星野 命教授

## I. 研究活動

1) 1975年度も前年度にひき続き、在京の児童心理学および性格心理学の研究者（岡宏子，白井常，中村素子，市原洋右の諸氏ら）と「パーソナリティの発達に関する比較文化的研究——反抗期における自我形成過程と親の態度——」をすすめた。毎月2～3回ずつの研究会のほか，1975年6月17～20日には八王子の大学セミナーハウスで，フィリピン大学の A. Minoza, C. Ordas-Botor 両教授，タイ・チュラルンコン大学の P. Bekanan 助教授らと1976年に予定されている共同調査研究の打合わせを実施した。

調査計画案は二次の検討を経たのち，76年夏より国内，マニラ市およびバンコク市の周辺において実施にうつされる予定で，このため日本学術振興会より海外調査研究費の助成が内定している。国内調査（実験をふくむ）には東京女子大学，聖心女子大学，東京大学の心理学卒業生および大学院生が参加している。

2) 日本電信電話公社経営調査室の委託による共同研究「家庭生活とコミュニケーションに関する研究」に，本学非常勤講師森岡清美，東京女子大青柳真智子，NHK放送研藤竹暁ら諸氏と参加，1975年4月24日から10月6日までに6回研究会を重ねた。この討議の経過と結論は，年末に報告書の形でまとめられた。

3) 1973年夏以来，国際基督教大学教養学部教育学科学生及び大学院教育学研究科学生の有志による卒業論文・修士論文作成のための研究調査が新潟県東頸城郡松之山町で行われてきたが，その後卒論作成のためだけでなく，「出稼ぎと過疎」をめぐる諸問題に関心を寄せる学生が「星野ゼミ」に結集したので，学生に同行して第二次松之山調査を1974年7月より75年1月まで断続的に行なった。メンバーはのべ14名で，資料の集計や合宿討議に参加したものを加えると21名（他大学の学生1名を含む）にのぼった。

この結果，1975年2月から6月にかけて，

- ①出稼ぎが子どもの性役割の獲得と適応に及ぼす心理的影響（笠井則夫修士論文）
- ②出稼ぎが母親のしつけ態度と子どもの適応に及ぼす心理的影響（笠井真理子修士論文）

③父親不在家庭における依存性の研究（斉藤せつこ学士論文）

④出稼ぎ家庭における母と子の依存性の研究（野村唱子学士論文）

の4論文のほか，松之山町の方々に配付するための報告書「灰色の街から白い村へ」が作成された。

4) 九学会連合の共同研究「奄美」の一部として日本心理学会会員として奄美諸島の喜界島における高校生の価値観調査に他の研究者とともに参加した。（1976.

2. 24—26)

5) 大学生を対象とする「集団の過程」の実践研究のため，聖心女子大学の3・



4年生を対象として、本学大学院教育学研究科学生及び青山学院文学部心理学研究室長谷川浩一助教授らの応援を得て、1975年11月1・2・3日千葉県富浦において集中的実践と観察記録を行なった。

6) 上記をその一部に含み、聖心女子大学文学部教育学科の「集団の過程」、同じく人間関係科の「個人間および異文化間コミュニケーション」の非常勤講師(通年)をつとめた。

また、東京都立大学人文学部にも出講(1975年10月～76年2月、「心理学特講：文化とパーソナリティ」)した。

## II. 学会発表, 講演等

1) 1975年4月26・27・28日の3日間九州大学教養部で開催された第1回コミュニティ心理学シンポジウムに出席し、討議に参加した。

2) 1975年5月24・25両日、東京教育大学で開催された日本相談学会第8回大会のシンポジウム「現代社会の人間関係の断絶」に発題者の一人として参加し、「クロス・カルチュラルな立場」から発言した。

3) 1975年9月3・4両日 都市センターで開催された日本社会心理学会第16回大会に参加し、そのプログラムの一部である第1回アジア研究者会議の司会者をつとめた。この会議には香港の中文大学より Dr. Chien Chiao が、またバンコクの Mahidol 大学の Dr. Pinit, Ratanakul が出席し問題提起を行なったのち、日本人参加者との討議が行なわれた。

4) 1975年12月17・18両日 筑波大学で第2回筑波国際シンポジウム「未来世界における日本の役割」の第2セクション(文化)にディスカッサントの一人として参加した。発題者は中村元博士, Dr. G. DeVos (カリフォルニア大学) および Dr. A. Wichiencharoen (タイ・シルバコン大学学長) であった。

5) 1975年12月29・30・31日および1月2日に東アフリカ、ケニヤ共和国ナイロビ大学で開かれた第2回パン・アメリカン心理学会議に日本学術会議より派遣されて出席した。これは国際異文化間心理学会の肝煎りで開催されたもので、17カ国から110数名以上が参集した(アジアからは僅か3名であった)。

以上のほか、本学で開催された第2回言語社会シンポジウム('75.8.22～23) および国際シンポジウム「文化の違いを越えたコミュニケーション——人間的責任の検討」('76.1.24～25) にも出席した。

講演としては次の機会があった。

1975. 4. 4—8 東京ロールシャッハ研究会技法講習会  
「ロールシャッハ検査法の意義」

1975. 7. 24—27 同上(中級)「ロールシャッハ反応の内容分析」

1975. 8. 14 神奈川県立技能訓練センター  
「性格テストの選択, 利用法と生徒指導について」

1975. 9. 1—3 大阪基督教短大児童教育学科上級生研修会  
「新しい旅立ちに備えて」
1975. 9. 26 横浜市教育委員会母親相談教室  
「子供の性格はどう変るか」
1975. 10. 3 神奈川県立技能訓練センター  
「生徒指導とカウンセリング」
1976. 3. 18 横浜市旭区希望が丘地区センター  
「地域社会におけるつきあいの心理」

以上のほか婦選会館「心理学教室」において三度（5/15, 9/18, 11/13）講演を行なった。

### III. 著 作

- 1) 教育と人格理論, 「教育学研究」42巻2号, 1975, 39—51
- 2) 人格理論の課題, 小口忠彦・辰野千寿編「教育心理学原論」, 有斐閣, 1975, 143—158
- 3) 人格の概念; 人格と社会的・文化的要因, 星野命・河合隼雄編, 「心理学4 人格」第1章, 第7章, 1975, 1—13, 99—120 (明田芳久との共同執筆)
- 4) 欲求とフラストレーション, 藤永保・高野清純編, 幼児心理学講座第3巻「パーソナリティの発達」第3章, 1975, 日本文化科学社, 68—98 (明田芳久との共同執筆)
- 5) 名著案内: Allport, G. W., "Personality: a Psychological Interpretation," 依田新・伊沢秀而編「読書案内文理学」1975, 社会思想社, 416—8
- 6) 哲学する思春期: 芸術の世界; 神・信仰, 平井信義・詫摩武俊・依田明編, 「思春期相談」, 1975, 有斐閣, 153—4, 155—6.
- 7) 男らしさ・女らしさと人間形成, 「現代性教育研究」季刊13号, 1975, 小学館, 68—77.
- 8) 生活様式(ライフ・スタイル)研究の意義, 星野命ほか編, 「年報社会心理学」16号, 1975, 頸草書房, 3—7.
- 9) 書評: Le Vine, R. A.: Culture, Behavior, and Personality, 「年報社会心理学」16号, 1975, 頸草書房, 195—199.
- 10) 書評: Lebra, T. S. & Lebra, W. P.: Japanese Culture And Behavior: Selected Readings, 「教育心理学研究」23巻2号, 1975, 62—63.

### IV. その他の活動(学会誌編集など)

- 1) 編集主任として: 「年報社会心理学」16号, 1975, 日本社会心理学会, 頸草書房
- 2) 副編集者として: 「ロールシャッハ研究」XVII, 1975, 東京ロールシャッハ研究会, 金子書房.

3) 編集委員:「心理学研究」「Psychological Research」日本心理学会(1974. 4—)

4) 編集委員:「教育心理学研究」日本教育心理学会(1975. 3—)

#### 古畑和孝教授

##### I. 研究活動

- 1) 均衡理論, 認知・態度の斉合化傾向に関する基礎的研究を続行している。
- 2) 日本教育心理学会研究委員会委員を依嘱された。
- 3) 上智大学大学院(教育心理学セミナー: 態度と行動), 東京大学文学部社会心理学科(「人間関係の社会心理学的基礎」)などで非常勤講師をつとめた。

##### II. 学会発表等

- 1) 1975年9月, 日本教育心理学会第17回総会(於・宮城教育大学)において, 「準拠集団と道德性の発達(第5報告)(その1~3)」を向井敦子助手らと口頭発表。なお, その部会の座長。(同総会発表論文集, 246—252頁所載)
- 2) 1975年9月, 日本心理学会第39回大会(都立大学; 於・国立教育会館)に出席。

##### III. 著 作

- 1) 準拠集団と道德性の発達(第1報告): 子どもの準拠人。(向井敦子助手共著) 国際基督教大学学報I—A「教育研究」1975, 18, 55—93.
- 2) 協同と競争; フィードバック; 観察法; チェック・リスト; 逸話記録。広岡亮蔵(編)「授業研究大事典」明治図書, 1975.
- 3) 競争と協同。  
「教育心理」1975, 23, (9), 20—24.
- 4) 教師・子どもの相互作用の意義。  
「特別活動」1975, 8, (12), 6—9.
- 5) (書評) D. E. Hunt and E. V. Sullivan *Between Psychology and Education*. Hinsdale, Ill.: Dryden Press, 1974. 「教育心理学研究」1975, 23, (3), 199—200.

#### 原 一雄教授

##### I. 研究活動

- 1) 学習の生理心理学的研究
  - (a) ヒトの加算問題における左右視野間の非対称性。
  - (b) 切断脳サルにおける視覚弁別学習の両眼間転移と脳損傷の影響。(昭和50年度文部省科学研究費「一般研究D」。)
  - (c) ラットの迷路学習に及ぼすニコチンの影響。(たばこ総合研究センターの委託研究。)

##### 2) 高等教育の評価

- (a) 高等教育機関の設置基準に関する研究。(民主教育協会特別研究班, 昭和

50年度文部省科学研究費「特定研究」の分担。)

(b) 私立大学の教育・研究の質的向上を図るための評価調査。(日本私立大学連盟大学問題検討委員会第六分科会の主査。)

(c) 高等教育機関における生涯教育の評価表作成。(トヨタ財団研究助成金による委託研究。)

(d) ICUの学事調査。(教学計画調査委員会委員。)

## II. 学会発表等

1) 1975年7月 たばこ総合研究センター主催のシンポジウム「現代における喫煙研究の現状とその方向」において、「喫煙研究の実験心理学的アプローチ」を発表。(同報告書13—18頁収録。)

2) 1975年9月 日本心理学会第39回大会(於国立教育会館)にて「視知覚における大脳半球左右非対称性の一研究」を発表。(同論文集160頁収録。)

3) 1975年9月 日本教育心理学会第17回総会(於宮城教育大学)にて「卒業生による大学教育の評価の試み」を発表。(同論文集 302—303 頁収録。)同部会の座長をつとめる。

4) 1975年11月 日本学術会議主催の国際環境保全会議(於京都国際会館)にて「In quest of new transdisciplinary concepts of "Environment" in education and culture.」を発表。(Abstract: International Congress of Scientists on the Human Environment (HESC), Science Council of Japan, 1975, p. 140収録。)

5) 1976年2月 電子通信学会(於機械振興会館)の「教育技術」部門にて「アメリカにおける大学教員の評価システムについて」を発表。(信学技報 Vol. 75, No. 223, 41—44頁収録。)

## III. 著 作

1) (三本広子・田中正文共著)「分割脳アカゲザルによる学習セットの両眼間転移の研究」京都大学霊長類研究所年報 1974, 45.

2) 「疲労回復および認知閾に及ぼす喫煙効果の研究——精神作業とニコチンの関係」たばこ総合研究センター・TASC 研究報告 75SA0702.

3) (翻訳)(広田君美・牛窪浩・柳田知司共監訳)ダン, W. L. 著「喫煙行動」人間の科学社, 1975, pp. 419.

4) (書評)ゴードン, L. V.・菊地章夫共著「価値の比較心理学:理論と測定法」年報社会心理学, 1975, 204—205.

5) (随筆)「戦後の私立大学——ICUの歩みを顧みながら」大学時報, 1975, 24 (124), 6—13.

向井敦子助手

研究活動など

1) 1975年10月 日本教育心理学会第17回総会(宮城教育大学)において、古畑和孝教授らと連名で「準拠集団と道德性の発達(第5報告)」を発表(同論文集, 246—251)

2) 「準拠集団と道德性の発達(第1報告)子供の準拠人」国際基督教大学学報 I—A 教育研究, 第18号, 55—93(古畑和孝教授と連名で、向井は(その2)を分担執筆)

3) 1975年4月～11月 「状況特性によって媒介された対人態度の形成過程についての実験的分析の試み(仮題)」深谷助手と共同研究で、ICU生を被験者として実験を行なった。現在結果の検討中である。

明田芳久助手(非常勤)

#### I. 研究活動

- 1) 古畑和孝教授の指導のもとに、児童の道德発達に関して、実験社会心理学的観点から研究。
- 2) 数理統計学の基礎についての研究会(立教大学・池田央教授他)へ参加。
- 3) 桐朋学園大学短期大学部へ「社会心理学」を出講。

#### II. 学会発表

- 1) 1975年9月(11～13日)、日本教育心理学会第17回総会(於・宮城教育大学)において、「児童の道德判断変化に及ぼすロールプレイングとその聴取の効果」を発表。その部会の座長。(同総会発表論文集, 252—253頁所載)

#### III. 著作

- 1) 欲求とフラストレーション, 藤永保, 高野清純(編)「幼児心理学講座 第3巻 パーソナリティの発達」日本文化科学社, 1975, 68—98頁, (星野命教授との共同執筆)
- 2) 人格と社会的・文化的要因, 星野命・河合隼雄(編)「心理学 4 人格」有斐閣, 1975, 99—120頁, (星野命教授との共同執筆)

八木沢慶子助手(非常勤)

- 1) 1974年4月 津田塾大学学芸学部英文科卒業後、教育学科研究生として本学に入学。

1975年4月 本学大学院教育学研究科入学。教育心理学専攻。

1976年1月より教育心理学研究室非常勤助手。

- 2) 1975年5月より国立精神衛生研究所優生部において山本和郎研究員の指導の下に、自閉症児に関する地域精神衛生活動に参加している。

#### C. 視聴覚教育研究室

視聴覚教育研究室には従来から日本視聴覚教育学会(会長布留武郎教授)の事務局が設置されていたが、1975年4月以後、日本放送教育学会(会長西本三十二名誉

教授)の事務局も設置されることになった。

1975年10月10日, 11日の両日, 新潟大学教育学部において日本視聴覚教育学会第12回大会と日本放送教育学会第20回大会が合同で開催された。当研究室からは教職員全員と大学院学生多数が参加した。(大会における活動は各人の研究活動の欄を参照のこと)

布留武郎教授

#### I. 研究活動等

本年度は, 放送文化基金による「テレビと児童の認知型」の研究活動に終始した。1974年秋に行った予備調査に続き, 1975年1月下旬から2月下旬にわたり小学5年生約400名について第1次調査を実施した。この調査は, 3種の認知スタイル(場独立型——場依存型), (分析型——非分析型), (熟慮型——衝動型)間の関係, 認知スタイルと知能, 創造性等の知的機能および性格特性との関係, マスコミ接触状況と認知スタイルとの関係を明らかにするものである。さらに, チャンネル選択と認知スタイルの因果関係を探るため, 11月に同一児童集団に第2次調査を実施し, 目下そのデータを分析中である。

#### II. 著 作

「認知型テスト日本版に関する一研究」(共) ICU教育研究18, 19, 1975年  
「マス・メディアと認知型に関する予備調査」(共) 放送文化基金研究報告1, 1975年3月

#### III. 学会発表

「テレビジョンと認知型」日本教育学会第34回大会, 1975年9月, 中央大学  
「テレビジョンと認知型(報告2)——その1 マス・メディア接触パターンと認知型, その2 認知型に関連する変数」日本視聴覚教育学会・日本放送教育学会合同大会, 1975年10月, 新潟大学

#### IV. その他

日本視聴覚教育学会会長 日本放送教育学会常任理事, 日本教育社会学会評議員, NHK総合放送文化研究所研究委員会委員

中野照海教授

#### I. 研究活動等

- (1) 日本視聴覚教育学会・日本放送教育学会1975年度連合大会(於新潟大学)において, 課題研究「放送教育研究の成果」を発表。
- (2) 放送文化基金財団の基金による, 「学校教育における放送利用の総合的研究」に参加。(筑波大グループとICUグループとの共同プロジェクト)
- (3) 「日本教育工学雑誌」(文部省助成による学会誌) 常任編集委員兼編集幹事。
- (4) 「日本教育工学協会」(関連研究団体の連合体) に理事として今年度より参加。
- (5) アジア地域ユネスコ加盟国フェローの会で「The Recent Trends of Educa-

tional Technology in Japan」を講義。

- (6) NHK中央研修所において、「Concepts and Methods of Educational Technology with special reference to their Application to Educational Broadcasting」を講義。
- (7) アジア経済研究所において、「アジアの教育改革計画」について講演。その他、各種教育団体において講演8件。
- (8) 「教育と放送」(NHK総合テレビ, 4月3日)ほか, 教育関係放送7件。
- (9) 文部省「理科等協力事業研究調査会」委員, および「アジア教育改革センター協力委員会」委員として参画。
- (10) 前年度に続き, 日本視聴覚教育学会常任理事および編集委員, 日本放送教育学会常任理事, NHK放送大学委員会委員, 全放送研究特別委員会委員, NHK学校放送諮問委員会(東京都)委員等。

## II. 著 作

- (1) 「放送教材の統合的機能」放送教育, 1975年8月, pp. 14—17。
- (2) 「教育工学による基本的事項精選の方法」授業研究, 1976年2月, pp. 67—73。

## 阿久津喜弘準教授

### I. 研究活動等

- (1) 1975年度科学研究費補助による「学級集団におけるオピニオンリーダーシップの機能およびその社会的能力との関係についての実証的研究」を実施中。
- (2) 日本視聴覚教育学会第12回大会・日本放送教育学会第20回大会の合同大会(1975年10月10・11日, 於新潟大学)において, 課題研究「教育革新の替及過程」について提案。
- (3) 日本視聴覚教育学会理事および編集委員。日本新聞学会研究委員(1975年11月まで)。『年報社会心理学第16号』編集委員。日本教育社会学会研究部長(1975年10月まで) および事務局長(1975年11月より)。

### II. 著 作

- (1) 『パブリック・コミュニケーション論』(共編著), 学文社, 1975年。
- (2) 「第二分科会“情報環境とマスコミ”報告」『新聞学評論』23・24号, 1975年, 49—51頁。
- (3) 「映像的コミュニケーションと言語的コミュニケーション」『放送教育』30巻4号, 1975年, 44—46頁。
- (4) 「一般コミュニケーション体系論への志向」(年報特集のコメント)『年報社会心理学第16号—生活様式の社会心理学』1975年, 207—209頁。

## 石本菅生助教授

### I. 研究活動等

- (1) C A I システムの開発と、学習プログラミングに関わる諸変数の研究
- (2) 放送文化基金による研究プロジェクト「学校教育における放送利用の理論と実践の体系化」に関する研究に参加
- (3) 学習工学研究会学習工学セミナー講師 昭和50年8月4, 5日 於名古屋学院

### II. 著作

『学習指導と意思決定』(Davies: Management of Learning の邦訳 50年4月 平凡社)

### III. その他

「日本教育工学雑誌」編集委員

## D. 理科教育法研究室

### 石川光男教授

#### I. 研究活動

1. 合成高分子および合成蛋白に対する放射線効果
2. 高分子電解質の溶液中における形態変化
3. 科学的思考力を養成する物理教育

#### II. 著作

1. Radiation Effects of Poly-L-Glutamic Acid and Poly-L-Lysine in the Helix-Coil Transitional State; Radiation and Environmental Biophysics, (1976, In press)
2. 科学的思考力の養成; 科研費特定研究, 研究報告 (1976)

### 柿内賢信教授

#### I. 研究活動

文部省特定研究「科学教育」の一部として、学習の心理過程の客観的研究を継続中、とくに個人の思考パターンの測定のための問題設計について研究。

コンピュータ処理による分析を行ない、一部その方法を授業に適用している。

#### II. 学会発表等

高校物理教育における生徒の役割と教師の役割

日本物理学会年会物理教育分科会講演 (1976)

#### III. 著作

- (1) 理科教育における教育工学の役割  
教育学全集補説 (小学館) p. 2 (1976)
- (2) 探究の過程のなかの帰納と演えき  
理科の教育 24 (1975) 585



(3) 小学校教育にのぞむこと

教育研究 31 (1976) 6

三宅彰教授

I. 研究活動

高分子物性の理論的研究, 特に重点を置いているのは

- (1) 連続鎖モデルに基づく鎖状分子の統計理論
- (2) ねじれのある stiff chain の統計力学
- (3) 高分子溶液における緩和現象の理論
- (4) 高分子臨界共溶の理論

理科教育におけるエントロピー概念の位置づけ

II. 学会発表等

星野義昭<sup>o</sup>・三宅彰: ねじれのある stiff chain の理論,

I ; 1975年4月5日 (日本物理学会年会, 京大)

II ; 1975年10月11日 (日本物理学会分科会, 日大工, 郡山)

三宅 彰: 星野義昭: "

III ; "

三宅 彰: 排除体積効果の理論に関する注意; 1975年5月25日 (高分子学会年次大会, 東大教養)

三宅 彰: 星野義昭: stiff chain モデルの拡張; 1975年11月4日 (高分子討論会, 阪大工)

三宅 彰: 鎖状分子の統計理論; 1975年10月11日 (日本物理学会高分子分科特別講演, 日大工, 郡山)

三宅 彰: 高分子臨界共溶現象の理論の問題点; 1975年11月1日 (高分子の微細構造に関する研究会, 東工大)

III. 著 作

Oxford Physics Series の B. R. Jennings & V. J. Movis: Atoms in Contact の翻訳 (丸善より刊行予定)

大内謙一教授

I. 研究活動

1. 核磁気共鳴 (NMR) 法によるアミド類の C—N 結合の束縛回転の研究
2. NMR による有機酸—有機基の 2 成分系における溶質・溶媒相立作用の研究
3. 自由エネルギー概念の理解を容易ならしめるための学習法の研究

II. 学会活動

数年前より日本化学会, NMR データ集積, 分析, 評価委員会委員として参画, 東北大学と ICU との提携により, 上記データの分析を開始する。

### Ⅲ. 著 作

「大学初年級における自由エネルギー概念の導入について」；ICU 教育研究 18 (1975)「化学熱力学」；広川書店 (1975)

### R. L. Rich 教授

#### I. 研究活動

1. Taught a special honors course in qualitative analysis at the University of Illinois in the summer of 1975.
2. Research on a new scheme of qualitative analysis.
3. Research on nitrogen fixation.

#### II. 著 作

1. "Preservation of Reactive Ions in Solid Solution", J. Chem. Educ., 1975, 52, 805.
2. "Practical Chemical English" Tokyo Kagaku Dojin, 1976, 200 pp., with H. Minato, now being published.

### D. C. Worth 教授

#### I. 研活動

Preliminary Research Reading on Solar Energy; Administrative Duties as Deam. CLA

#### *Current Research Activities:*

Currently studying several aspects of *solar energy* (thermal and electrical) utilization. As preparation for this, visited researchers and institutes at six universities in U. S. A. during period Jan.-Mar. 1975 while on sabbatical leave from ICU.

#### II. 著 作

1. "Isospin Forbidden Resonances In The Reaction  $93\text{Nb} (p, \alpha) 90\text{Zr}$ " *Physical Review Letters* vol. 25, no. 7, 17 Aug. 1970, pp. 453—6. (N. Gue, L. M. Polsky, and D. C. Worth)
2. "Polarization of Neutrons From The D-T Reaction And In N-P Scattering" *Nuclear Physics A* 180, 1972, pp. 657—667. (N. Ryu, J. Sanada, H. Hasai, D. C. Worth, M. Nishi, T. Hasegawa, H. Ueno, M. Seki, K. Iwatani, Y. Nojiei and K. Kondo)

### E. 教育社会学研究室

1. 原喜美は、国際交流基金により、1975年4月26日より、フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学に、日本研究講座主任教授として派遣され、1976年5月下旬帰国の予定である。フィリピンにおいては、日比両国の女性の地位について、

比較研究を進めている。

2. その間 I C U の教育社会学の講義は、学部、大学院とも、河野重男教授（お茶の水大学）がご担当下さり、非常に有意義であったことを、感謝をもって記させていただきます。
3. なお原喜美の著作の主なものは次の通りである。
  - a. 「アメリカの環境教育の動向」教育展望増刊 No. 5, 1975.
  - b. 「女子教育の展開と社会変動」現代教育社会学講座 2 東京大学出版会. 1976.
  - c. “Status of Japanese Women: Career-Mindedness of University Graduates” 社会科学ジャーナル13号, 1975. (原 喜 美)

## 2. 大学院教育学研究科修士論文

### 1973年 6 月卒業者 4 名

#### A. 教育哲学 (1)

立川 明 (1890年代末期におけるジョン・デューウイの教育思想)

#### B. 視聴覚教育 (2)

黄 英甫 漢字の視覚的效果：一つの実験的研究

金 英信 テレビ暴力番組と子どもの攻撃的態度に関する一研究

#### C. 英語教育 (1)

府川 謹也 On the Predictability of the Manner and Order of Rule Application

### 1974年 3 月卒業者 18名

#### A. 教育哲学 (1)

吉岡 良昌 ペスタロッチにおける合自然性の教育理念  
——自発性から愛へ——

#### B. 教育心理学 (4)

三本 広子 部分的分割アカゲザルによる色弁別学習セットの両眼間転移

中里 修子 自尊心に関する一研究 ——自尊心の働く状況の分類と、その状況における個人の反応型の分類の試み——

小川真由美 不均衡低減様式と性格変数：大学生における権威主義，内容志

## 向／情報源志向からの考察

沢田 豊 問題解決状況におけるアルコール中毒者の行動の比較

**C. 視聴覚教育 (4)**

佐賀 啓男 連想法による文字刺激とそれに対する線画刺激の意味の研究

坂本 久男 視覚教材の相対的効果についての実験的研究

高橋真由美 朗読と談話における話しコトバの“リズム”について

渡辺 良 マス・メディアと国の発展に関する一研究 ——120ヶ国 31 変数についての分析——

**D. 英語教育 (7)**

力石美知子 An Examination of English Verbal Idioms

金井 礼子 An Approach to Tense and Aspect in Japanese

小林 絢子 The Old English Infinitive in Aelfric's Works

村田 忠男 A Study of Deep Sentence Patterns of English

成田 一 A Study of Nominal Modifiers in English

田中 七朗 On the Inadequacy of Extraposition Transformation and Subject Replacement Rule with Reference to Strycture-Preserving constraint Hypothesis

山口 堯 A Study of English Infinitive

**E. 理科教育 (2)**

新井 健 特殊相対性理論の高校物理教育課程への導入に関する基礎研究

篠原文陽児 コンピュータによるオープンエンデッド型問題の作成 ——物理教育におけるコンピュータ利用——

**1974年 6 月卒業者 3 名****A. 教育哲学 (2)**

林 美枝子 イギリスに於ける総合制学校への動き

村瀬 良子 キルケゴールにおける批判的主体の形成 ——『現代の批判』の教育論的意義——

**B. 教育心理学 (2)**

田中 正文 前脳交連切離ザルに於ける反復逆転学習の両眼間転移

Wayne, June Happiness and Goal Orientation

**1975年 3 月卒業者 14名****A. 教育哲学 (4)**

本田 栄一 教育における連続と非連続の問題 ——O. F. Bollnow における教育への「新しい根本概念」の導入について——

- 仁木 茂 デューイ初期の倫理学形成過程  
 桜井 静 ハワイにおける日本語学校の変遷とその社会的機能について  
 鈴木二三男 デューイにおける社会哲学と教育の問題

**B. 教育心理学 (4)**

- 明田 芳久 児童の道德判断変化に及ぼすロールプレイングとその聴取の効果  
 笠井真理子 出稼ぎが母親のしつけ態度と子どもの適応性に及ぼす心理的影響  
 笠井 則男 出稼ぎが子どもの性役割獲得と適応に及ぼす心理的影響  
 森川 多恵 二者択一の行動における条件が、選択肢の魅力度の変化に及ぼす効果

**C. 英語教育 (4)**

- 青木 恵子 Reason Adverbial Clauses Introduced by Because  
 三好 重仁 Problems in English Relativization ——The Promotion Analysis and its Problems——  
 坂本 満美 An Approach to Tense and Aspect in English  
 志関 義昭 It-replacement and Tough Movement

**D. 理科教育 (2)**

- 大谷 隆和 17世紀光学の諸局面に関する歴史的研究  
 脇田 剛 ゴウリムシの生物教育への応用とその意義

**1975年6月卒業者 11名**

**A. 教育哲学 (2)**

- 飯島 信 天皇制国家体制下における臣民教育の理念と大正自由主義的新教育の現実 ——特に大正デモクラシー下の『信濃教育』を中心として——  
 村上 初穂 アメリカの大学理事会 ——その歴史的背景と現代の様相——

**B. 教育心理学 (3)**

- 木浪富美子 幼児の探索的行動に及ぼす「状況の不確定度」の影響についての実験・研究  
 桐山 雅子 心理治療者の体験過程へのかかわり方に関する一考察  
 熊谷美佐子 通様相性についての実験心理学的研究 ——通様相性を証明する方法——

**C. 視聴覚教育 (1)**

- 川島真理子 TV視聴か幼児の攻撃的行動及び非攻撃的行動の観察模倣学習に及ぼす影響に関する一研究

**D. 英語教育 (5)**

- 河村 敦子 An Analysis of Syntactic Errors Made by Japanese Senior High School Students
- 木村 博子 A Study of English Nominalization ——Action Nominals vs Drived Nominals——
- 小西千恵子 A Study of Purpose Infinitives in English
- 篠 晴子 On Complex NP Shift
- 多和 わ子 A Study of Pronominal and Reflexive Forms in Japanese

**1976年3月卒業生 18名****A. 教育哲学 (5)**

- 陳 博誠 東アジアにおけるキリスト教教育の衰退に関する実証的研究, 特に日本, 中国に影響過程を中心として
- 狩野 茉莉 下中弥三郎の教育思想
- 佐藤 尚子 横井小楠における学問と政治
- 下村 啓子 ヘーゲルの精神現象学における承認の概念 ——主客関係の形而上学に対する間主体性の形而上学——
- 田畑 恭子 O. F. ボルノーの教育思想

**B. 教育心理学 (1)**

- 下田 僚 ロールシャッハ反応の安定性 ——特に逸脱言語表現について——

**C. 視聴覚教育 (4)**

- 赤枝 紅子 児童の認知型と学校放送理科番組に関する一研究
- 飯塚 泰弘 児童の認知型と学校放送社会科番組に関する一研究
- 高野 栄 テレビ暴力番組と子どもの攻撃性に関する研究 ——認知テンポに関連して——
- 山下 寿子 主婦と昼間連続ドラマ：利用と満足に関する一研究

**D. 英語教育 (5)**

- 赤木 敬子 An Analysis of English Quantifiers as Higher Predicates in the Deep Structure
- 荒牧 長久 A Summary of an Analysis of Japanese Dentals
- 村中 亮子 The Study of the Pronoun of Address in Chaucer's "Troilus and Criseyde"
- 若山 佳子 A Study of the Application of the Principle of Readability Formulas to English Education in Japan
- 鷺山久美子 On the Accent of Particles in the Tokyo Dialect of Japanese

## E. 理科教育 (3)

大海美知子 高等学校化学教育における酸化 - 還元反応の教授法

久村 敏男 問題解決行動の分析 ——子どもの物質観の変遷——

町田 健一 高校物理教育における特殊相対性理論の導入に関する考察

## 3. 教育実習報告

1975年度教育実習は64名（都の受入れ承認38名）の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

## 1. 実習生総数 64名

男 子 21名

女 子 43名

## 2. 実習日程

4月28日～5月10日 熊本大学教育学部付属中（熊本県）

5月7日～5月20日 白梅学園高校（小平市）

6月2日～6月14日 三鷹三中，小金井緑中，都立大付属高，伊邦北高校（長野県）岩井市立長須中（茨城県）八戸市立長者中（新潟県）保土ヶ谷中（横浜市）

6月5日～6月18日 蕨高校（埼玉県）

6月9日～6月21日 三鷹一中，三鷹二中，調布三中，港工業高校，学芸大付属世田谷中，恵泉女学園高，米沢興譲館（山形県），大宮市立植竹中（埼玉県）

6月25日～7月8日 立教女学院

9月8日～9月20日 高崎市立女子高（群馬県）

9月8日～9月27日 東京教育大付属中

9月16日～9月28日 三鷹高校

9月22日～10月4日 小金井東中，小金井二中，錦城高校（小平市）

10月6日～10月18日 三鷹四中，浦和明の星女子高（埼玉県）

10月13日～10月25日 三鷹五中，屋代高校（長野県），平塚市立浜岳中（神奈川県）

10月27日～11月8日 魚津高校（富山県），錦城高校

11月10日～11月22日 大阪教育大学付属池田中

12月1日～12月13日 川崎市立西高津中（神奈川県）山形市立第三中（山形県）

## 3. 実習協力校

学 校 名 教 科	三鷹一中	三鷹二中	三鷹三中	三鷹四中	三鷹五中	調布三中	小金井東中	小金井緑中	小金井二中	三鷹高校	都立大付属	港工業高	伊邦北高
社理数英	1 2 4	6 2			1 1		1 2	2 1					
会科学語			3	2		2			1	5	1	1	1
計	7	8	3	2	2	2	4	3	1	5	1	1	1

浦和明の星	錦城高校	世田谷中	恵泉女学園	屋代高校	高崎女子	米沢興譲館	熊本大付属	植竹中学	教育大付属	長須中学	池田中学	立教女学院	浜岳中学	蕨高校	長者中学
	1	1 1	1	1	1							1		1	
2	1					1	1	1	2	1	1		1		1
2	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1

保土ヶ谷中	白梅学園	西高津中	魚津高校	山形第三中学	合 計
1			1		16
	1				7
		1		1	5
					37
1	1	1	1	1	65*

(\*数学1名の欠員がでたため)  
実習生総数と異なる。



## 4. 学 科 別

性 別 学 科	界	女	合 計
人 文 科 学 科	2	3	5
社 会     "	4	5	9
理     学     科	0	8	8
語     学     科	3	12	15
教 育 学 科	6	5	11
大 学 院 教 育	0	3	3
大 学 院 行 政	1	0	1
聴     講     生	5	7	12
合           計	21	43	64

5. 1975年3月卒業生165名中、教育職員免許状を取得した者は22名（社会4，理科2，英語18），また、教員就職状況は下記の通り。

市立中学            男子1名，女子2名（英語）  
 市立高校            男子1名（英語）  
 都立高校            女子1名（英語）

## 4. ひ と の う ご き

## ■新任・就任・辞任

Edward Beauchamp フルブライト教授（比較教育）：ハワイ大学より75年9月より着任。

上林喜久子助手（非常勤）（教育学）：75年4月より着任。

飯塚 泰弘助手（非常勤）（視聴覚教育）：75年4月より着任。

武市 恭子助手（非常勤）（視聴覚教育）：75年4月より着任。

浜野 保樹助手（非常勤）（視聴覚教育）：75年9月より着任。

明田 芳久助手（非常勤）（教育心理学）：76年1月より着任。

八木沢慶子助手（非常勤）（教育心理学）：76年1月より着任。

篠遠 喜人学長（生物学）：75年8月31日，学長を退任。

渡辺 良助手（常勤）（視聴覚教育）：75年9月，UNESCO, バンコクのオフィスにて教育工学担当のため退任。

高野 栄助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年3月退任。

武市 恭子助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年3月退任。

深谷 澄男助手（非常勤）（教育心理学）：76年3月退任。

沖 千津子助手（非常勤）（教育心理学）：76年3月退任。

Jerry Higgins 招聘準教授：76年6月，カリフォルニア大学，サンタバーバラに帰任。

#### ■海外出張・帰任・休職

長 清子教授（教育思想史）：75年4月14日から18日まで，スイス，ジュネーヴにおける世界教会協議会（WCC）常任委員会に出席。

75年5月6日から7日，ニューヨークにおける UBCHEA (United Board for Christian Higher Education in Asia) に出席。

75年5月8日，Japan ICU Foundation の annual meeting に出席。

75年7月下旬渡英，8月15日より22日，ランカスター大学における VIIIth Congress of the International Association for the History of Religion に出席。

75年9月より6ヶ月間休暇。75年10月，オックスフォード大学の St. Antony's College で日本思想史の Seminar を担当。

75年11月23日より12月10日，アフリカ，ケニアのナイロビ WCC の第5回総会に出席。

75年11月20日より22日，WCC 常任委員会に出席。

76年1月から2月，ケンブリッジ大学で3回にわたる日本思想史連続講義を行う。

原 喜美教授（教育社会学）：75年4月23日，Ateneo de Manila 大学の Japanese Studies Program の Director として赴任。

星野 命教授（心理学）：75年12月29日から76年1月2日，ケニア，ナイロビ大学，第2回パン・アメリカン心理学会議に出席。

中川 秀恭教授（基督教教育哲学）：75年6月25日から29日迄，シンガポールで行われた The 9th Asian YMCA Leaders Conference に出席。

75年9月24日から10月24日迄，Worth 国際教育交流室長と東南アジア諸大学視察。

R. L. Rich 教授（化学）：1975年夏，米国イリノイ大学で特別講義。

篠遠学長：台北で行われた第12回アジア基督教大学学長会議に75年4月17日から20日まで出席。

D. C. Worth 教授（物理学）：75年1月より3月迄休暇の期間中，渡米。

都留 春夫教授（ガイダンス，カウンセリング）：75年1月より6ヶ月間休暇。